

## 第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

### 小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	大阪教育大学附属平野小学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	幸せ感を育てる造形遊びプロジェクト

〈活動・研究の意義および活動報告〉

#### 1. 活動に至る経緯

新型コロナウイルスの大流行によって、人々はこれまで積み上げてきた価値観や思考に抜本的な見直しを迫られている。既存の枠組みによる経済成長だけでは推し量ることができないウェルビーイング(well-being)な社会の実現が、日本だけでなく国際社会全体の喫緊の課題になっている。経済成長から心の成長へ。経済成長を達成し、ものが豊かに溢れた時代であっても、必ずしも「幸せ感」は感じられなくなった。言うまでもなく、「幸せ感」とは、「教えられるもの」ではなく、「育てる」ものである。学習指導要領の目標の前文に「表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を育成することを目指す」とあるとおり、図画工作科は楽しく豊かな生活・社会を創造・形成する基盤となる教科である。図画工作科は、単に造形についての知識や制作のための技能を獲得させるものに留まるだけではなく、精神的に健康な人格を育て、人間としての完成に至る過程において不可欠な営みとして理解される。つまり、図画工作科は、「幸せ感」を「育てる」ことのできる教科だと言える。

図画工作科の表現の中でも、特に「造形遊び」は、子ども自らが材料に働きかけ、その行為や活動そのものを楽しみながら追求していくものである。子どもが材料などに働きかけ、自分の感覚や行為を通して捉えた形や色などからイメージをもち、思いのままに発想や構想を繰り返す、技能を働かせてつくる。

この活動への没頭は、意識が体験でいっぱいになり、瞬間に感じることに望むこと、考えることが互いに調和している。この瞬間をフロー体験と呼ぶ。フローにある人は完全に集中している。いつもより自分が強くなったと感じ、何時間もがたった一分に感じられる。やり遂げられた後に、振り返り、体験の素晴らしさへの感謝でいっぱいになる。つまり、振り返りの中で幸せ感を育むことができると考える。

#### 2. 活動・研究の目的（ねらい）

造形遊びに没頭することでフローの状態（深い集中と没入）に達し、心地よい幸せ感を育むことができる。また、造形遊びを、他者と協力し、お互いの作品を認め合うことで、社会形成者としての第一歩である他者意識を醸成することができる。

#### 3. 活動内容

1学期には、色水遊びをした。身近にあるいろいろな材料を並べたり、つないだり、積んだりして、進んで材料に働きかける姿が見られた。また、作りながら考えたり、様々な方法を試したり、次々と発想が展開した。また、グループで活動に楽しんで取り組む中で、新しい色を見つけたくさんの色をつくることから、面白い活動を思い付いたり考えたりする力や、考えた活動を実現するために色の並べ方を工夫する力を育てた。

2学期には、幼稚園児と造形遊びに取り組んだ。造形活動では、仲良く協力しようというグループの枠に留まるのではなく、相談、批判、構想のくいちがいによる衝突、協調、妥協など、いろいろな集団意識の芽生えの上に子どものイメージが描き出される。園児と一緒に楽しく活動する時に、形だけのグループづくりから一歩進めて、集団の中の相互影響による効果を生かしたグループ活動ができる礎を育んだ。また、言語だけではなく造形を通して感覚的に繋がることができ、協力して表現したことを実感できるようにした。

3学期には、切り込みを入れた段ボールを異学年も交えたグループで、思い思いに組み合わせていった。小さな段ボールを組み合わせて、バランスを考慮して大きな形に変えた。そのためにもグループの仲間との協力が必要となる場面も多く、下級生・上級生や友人と関わりながら活動を進めることを通して、新しい形をつくりだすために必要な資質・能力を育てた。指導に当たっては、十分な量の段ボールを準備し、机上ではなく床で活動できる場の設定に配慮することで、よりダイナミックな活動となるように配慮した。またグループの活動を見合えるような時間も十分に設けた。

#### 4. 子どもたちへの効果（成果・課題）

3学期の造形遊びに取り組む児童の姿と振り返りの記述から仮説の検証を行った。（1年生から抜粋）

- ・ 1日目にやった時のものを進化させて、細かいパーツを繋げて長くして、上級生と大きいものができた。
- ・ 最初は、こんなダンボールで何をやるのかなと思ってたけど、いろいろなおもしろいダンボールのパーツを使ったら不思議なものがつくれました。例えば、すごく大きい家や、公園などができました。すごく楽しかったです。
- ・ 上級生にダンボールをカッターで切ってもらって、切り込みをいれて大きなものをつくりました。1回目は小さいもので終わったけど、2回目は大きなものをつくれました。すごく大きかったです。
- ・ 上級生といろいろなダンボールを組み立てたりしました。わたしの班のものは、わたしは船に見えました。とても楽しくてドキドキわくわくしました。
- ・ 上級生が言う通りに切ってくれたり、「こんな形とかにすると、おもしろかったりかっこよく、かわいくできるよ。」と声を掛けてくれたりしたので嬉しかったです。
- ・ 上級生とダンボールを繋げたら、海賊船みたいに大きいものができたので、すごいと思いました。力を合わせてやったら、大きいものだけじゃなく、小さいものもできて、窓も1こつくれたので、よかったです。次は、紙コップでやってみたいと思いました。

児童の姿からは、ダンボールを組み合わせることに没頭してる様子や上級生と相談している姿が見られた。振り返りの記述からは、「上級生と協力した」、「上級生が声を掛けてくれた」、「ダンボールを組み合わせて大きくした」、「楽しかった」等の語句が多く確認できた。フロー体験が、自信の獲得や快感情を促進させ、「楽しかった」や「おもしろかった」という振り返りに繋がっていると考えられる。また、「上級生と」「上級生が」という語句が非常に多く、他者意識が醸成されたことも示唆された。

成果としては、1年間を通して、造形遊びに取り組む、図画工作科の時間においてフロー状態を多く生産したことは、児童が図画工作・美術を好きになるきっかけをつくることのできたのではないかと感じている。実際、図画工作科の時間を楽しみにしている児童は多く、好きな教科に挙げている児童も多い。「楽しかった」、「おもしろかった」と振り返りをする児童が大半である。その結果として、幸せ感を育むことができたと考えている。また、同じ学級の友だちや幼稚園児、下級生・上級生とグループをつくり、共に造形遊びに取り組んだことは、仲良く協力するだけではなく、相談、批判、構想のくいちがいによる衝突、協調、妥協など、いろいろな集団意識の芽生えの上に子どものイメージが描がき出される結果となった。活動する時に、形だけのグループづくりから一歩進めて、集団の中の相互影響による効果を生かしたグループ活動ができる礎を育んだと言える。

課題としては、低学年のめあてを立てることに主を置き過ぎ、中学年・高学年としてのめあてになっていたかどうかは、疑問が残った。今後、異学年で学習に取り組む際には、学年の学びの枠にこだわりすぎないことに気を付けて題材を設定したい。また、フロー状態を測定するには、心理学に基づいた量的分析が必要となり、本研究ではそこまで至っていないため今後の研究に活かしたい。

#### 参考文献

- ・ 前野隆司・前野マドカ『ウェルビーイング』日経文庫,2022年3月
- ・ M・チクセントミハイ『フロー体験入門－楽しみと創造の心理学－』世界思想社,2010年5月
- ・ 宮坂元裕『「図画工作」という考え方』黎明書房,2016年5月
- ・ 辻田嘉邦著作集『造形美術教育のポートフォリオ』実践美術教育学会,2012年2月
- ・ 大橋功・新関伸也・松岡宏明・藤本陽三・佐藤賢司・鈴木光男・清田哲男『美術教育概論（新訂版）』日本文教出版,2018年10月
- ・ 文部科学省『小学校学習指導要領解説 図画工作科編』日本文教出版,2017年6月